

# ミシズ・ギヤスケルの『クランファド』

山本史郎

## ギヤスケル夫人と私

山本史郎と申します。<sup>1</sup>石塚先生、ご紹介くださりありがとうございます。本日は、たいへん由緒あるギヤスケル協会でお話しさせていただく機会を下さりありがとうございます。とくにお世話になった多比羅先生、市川先生、それに本日この席にはいらっしやいませんが、ご仲介いただいた田中孝信先生にも心よりお礼申し上げます。

シンポジウム、研究のご発表を聞かせていただきましたが、ぴちぴちの若手の方々の先ほどのシンポジウム、勢いがあつてすばらしいなど感心しておりました。ずいぶん勉強になりました。これからさせていただく話はあのような密度はありませんから、どうかリラックスしてお聴き下さい。楽しんでいただければ幸いです。

あらかじめ申し上げておきますが、ギヤスケル夫人について、私は何も知りません。私とギヤスケル夫人との関係——などというと、なにか怪しい仲のようですが——私とギヤスケル夫人のご縁はあまり深くありません。22才のころにイギリスで勉強する機会があり、その時にいわゆる *social problem novels* というジャンルのことを知り、その代表的なものとして *Mary Barton, North and South* などを読みました。

その後、大学の教師になり文学の講義をするときになって、*North and South* を取り上げました。*North and South* はギヤスケル夫人の代表作というわけではないでしょうが、人物造形が、それぞれの人物が代表する価値観と比較的密接に結びついているので、小説のことを知らない学生に、小説をどう読むのか、小説から何を読み取るのかというふうなことを教えるのに好都合だったから選びました。同じように社会問題を扱っていても、*Mary Barton* のほうは物語的な面白さが勝っているので、小説として優れている点と、社会問題を扱っているとされる部分に

微妙にずれがあるような気がして、取り上げませんでした。(これは私の素人ゆえの誤解かも知れません。)その後 *Cranford* や *Ruth* なども読みましたが、*Ruth* については、読んでみると悲しくてやりきれなくなるので、その後二度と読みませんでした。

ちなみに、悲しくてやりきれないといえば Hardy の *Tess of the d'Urbervilles* もそうですね。それでも、*Jude the Obscure* よりはまだましかと思って、文学の講義で教えたことがあります。結果は、後悔です。涙なしには語れないとは言いませんが——まさか授業中に目頭が熱くなったわけではありませんが——授業のために読み直して、ほんとうに暗い気分になりました。とはいうものの、学生の前で Hardy の宇宙観などともっともらしく話すことで、物語に対してある種の距離を置くことができるようになったように思います。1人でちまちまと読んで *private* な空間だけで相対していると、その読書体験をひきずってしまって、暗いイメージしかなかったのですが。それにしても、Hardy は文章がすばらしいですね。詩的でうっとりさせられることがよくあります……。

ちょっと、Hardy 協会と間違えているようですから、話をギヤスケル夫人に戻します。私のギヤスケル夫人との関わりはこの程度で、ほんとうに素人です。でも、考えてみると、もしも何か面白いことをお話しできるほどギヤスケル夫人についてよく知っているなら、いま私はここにいるはずがなくて、むしろそちら側、皆様の側に座っているはずです。したがって、わたしがギヤスケル夫人について専門的なことを話すのは、お釈迦様に説法ということになるので、わたし自身の土俵に皆様をひきずりこんで相撲をとらせていただくことにします。というわけで、本日の話題は翻訳です。

そこで本題ですが、私の所属は東京大学総合文化研究科の言語情報科学という専攻で、いま教えている分野は、大雑把に言えば異文化交流論です。もっと具体的にいうなら翻訳論です。翻訳の実践的な指導もしないわけではありませんが——「翻訳論」というと、多くの学生には上手な翻訳のやり方を教えてくれるのだろう、くらいの意識しかありません——それよりも、翻訳とはどういうことかということ、つまり翻訳についての理論、すなわち翻訳論を教えています。ただし、最近では「翻訳論」というより、世界的には「翻訳学」*Translation Studies* という言い方が主流です。いずれにせよ、翻訳についての考察という、比較的新しい分野、

discipline を研究したり、教えたりしています。本日は、このような観点から、ギヤスケル夫人の *Cranford* の翻訳についてお話しさせていただきたいと思います。

## 世界名作大観

まず、2冊の本をご覧ください。古めかしい本ですが、1冊目の背表紙には「高慢と偏見上巻」と題名が書かれてあり、その下には、「オースチン」と「野上豊一郎」という名が並んで記されています。2冊目の背表紙は、「高慢と偏見下巻」の脇に、「附克蘭ファド」と小さく記され、下には「オースチン、平田禿木、ギヤスケル、野上豊一郎」と記されています。

奥付を見れば、国民文庫刊行会が、昭和3年に発行した本であることが分かります。これは「世界名作大観」という文学全集の1冊でした。また、さらに、表紙の裏を見れば、もともと島田謹二先生の蔵書で、先生が駒場の図書館に寄贈されたものであることが分かります。

なお、このシリーズは、翻訳だけでなく原作も合わせてのっている、極めて特異な書物です。

## 野上豊一郎

まずは、話の前提として、この『克蘭ファド』、すなわちギヤスケル夫人の *Cranford* を翻訳した野上豊一郎について、ごく簡単にご紹介しておきましょう。

野上は1883年に生まれ、1950年に亡くなっています。英文学者ですが、能楽の研究者としても知られていました。大分県の出身ですが、第一高等学校を経て1908年に東京帝国大学文学部英文科を卒業しています。同級生に安倍能成、藤村操、岩波茂雄などがおり、夏目漱石に師事し、影響をうけました。卒業後の1909年、講師として法政大学に奉職し、教授にまでなりましたが1933年に内紛にからんで辞職しました。太平洋戦争後、再び法政大学に招かれ、学長にまでなりました。妻は作家の野上弥生子、ダンテの『神曲』を訳した野上素一は子息です。

英文学者としてバーナード・ショーなどを中心とするイギリス演劇を専門としましたが、能楽の研究でも知られ、海外へ紹介したことでも有名です。能に関する著書が多数ありますが、翻訳もいくつか行っていて、国民文庫刊行会の「世界名作大観」のシリーズでも、

- (1) ジェーン・オースチン『高慢と偏見』(1927)
- (2) ジョナサン・スウィフト『ガリヴァの旅』(1927)
- (3) 『マリ・バシュキルツェフの日記』(1927-1928)

などがあります。翻訳家として自他ともに許すところがあったことがうかがわれます。

ここにある2冊のうち、1冊は『高慢と偏見』です。43章までの野上豊一郎の翻訳と、それに対応する *Pride and Prejudice* の原文です。2冊目は『高慢と偏見』の44章から61章(最後)までの、平田禿木による翻訳と、『クランファド』の野上豊一郎訳です。原文は *Pride and Prejudice* のみです。

あれっ、なぜ『高慢と偏見』の残りが野上訳ではなく、平田訳なんだろう、と思われる方もいらっしゃるでしょう。そもそも、残りは3分の1ほどなのでアンバランスです。この奇妙な事実の裏には、衝撃の事実が隠されています。そのことは『高慢と偏見』についての平田禿木によるまえがき(「例言」)に記されているので、ちょっと読んでみます。

『高慢と偏見』下巻の原稿は、野上氏の手で疾く脱稿され、刊行會の金庫へ納まってゐたのであつたが、再閲を請ふべく同氏の許(もと)へお届けするその途中に於て紛失の厄(やく)に遭ひ、何(ど)うしても発見されず、同氏はこれと合巻になるべき『クランファド』の譯に忙(せは)しく、再び稿を起されるとあつては、その完成の甚しく遅延するといふので、本年仲夏の頃會の幹部から自分にその執筆を委嘱されたのでした。(ギヤスケル(「例言」), 1)

ご経験がおありの方々もたくさんいらっしゃると思いますが、翻訳というのはたいへんな作業です。辛気くさい仕事です。それだけに、翻訳者にとっては仕上がった作品は血と汗の結晶です。原稿を紛失されたときいて、野上が何と言ったのか? 録音でも聞くことができれば、人間、野上豊一郎の生々しい慟哭の聲が聞こえてくるかもしれませんが、残念ながら録音はおろか記録の類はいっさい残っていません。原稿が失われたといえ、J.S. ミルがトーマス・カーラ

イルの *French Revolution* を暖炉にくべた話が有名です。ご存じのように *French Revolution* は相当ぶ厚い3巻本です。当時のことですから手書きの原稿で読みにくいだろうし、ミルにしてみれば、読んでくださいともってこられたものの、内心、「長くってやだなあ。めんどくせえな」と思い、そんな心の動きに対して、手が無意識のうちに気をきかしてしまったのかどうか……。

それはともかく、『クランファド』の本文に先だって、翻訳者の野上による「はしがき」がついています。その最後に、「昭和3年11月」という日付が記されていますが、さらに括弧書きがあつて、「大正10年に本文訳了と共に書いて置いた『はしがき』を書き直す」と書かれています(ギヤスケル(「はしがき」), 12)。大正10年というと1921年です。その年にすでに訳稿が完成していたとすれば、先ほどご紹介した平田の「例言」に書かれていた、「昭和3年(すなわち1928年)の夏に、野上が『クランファド』の翻訳に忙しいので平田が依頼された」という説明と、つじつまが合いません。衝撃の事実について、これもちょっとしたミス터리ですが、詳しい事情は分かりません。ひょっとしたら原稿をなくされたことで野上がヘソを曲げてしまい、オレはもう知らん、出版社の責任でなんとかしろ、などとねじこんだのかもしれませんが……。

## 『クランファド』

野上豊一郎訳の『クランファド』は、ギヤスケル作品の翻訳としてもっとも古い部類に属するものではないでしょうか。古い註釈が存在します。すなわち、『研究社英文學叢書』の1冊で、岡田美津という人によるもので、1922年9月の日付がついています。これに対して、野上が『クランファド』を最初に訳したのは1921年と「はしがき」に記されているので、野上訳の方が早いということになります。事実かどうか確認することはできません。ギヤスケル夫人の作品の翻訳では、1948年から49年にかけて、『メアリ・パートン：マンチェスタ物語』という題名で、北澤孝一なる人物によって訳され、2巻本で出版されています(日本評論社「世界古典文庫」)、これが *Cranford* を除けば、私が調べ得た中でもっとも古いものです。

では、『クランファド』の翻訳について、具体的にどんな訳がなされているか見ていきましょう。まずは Chapter 1 の一節です。

As everybody had this rule in their minds, whether they <sup>(1)</sup>received or paid a call, of course no absorbing subject was ever spoken about. We kept ourselves to short sentences of small talk, and were punctual to our time.

I imagine that a few of the gentlefolks of Cranford were poor, and had some difficulty in <sup>(2)</sup>making both ends meet; but they were like the Spartans, and concealed their smart under a smiling face. We none of us spoke of money, because <sup>(3)</sup>that subject savoured of commerce and trade, and though some might be poor, we were all aristocratic.....

何だか予備校で入試問題の解説をしているようですが、まず下線(1)をご覧ください。野上譯は「訪問を受けた場合でも、拂った場合でも」(ギヤスケル, 5)となっています。「訪問を受ける」はよいにしても、「訪問を拂(払)った」はふつうの日本語の表現にはありません。これは paid a call の pay を意識してのことであることは明らかです。つぎに、下線(2)です。野上譯は「二つの端[収入と支出と]を揃える」(ギヤスケル, 5)です。これも both ends という英語の表現を意識していることは明らかです。

すでに、これだけの例から、野上が何を行おうとしているのかが見えてきます。「訪問を払う」という日本語が不自然であることを、野上が知らないはずはないし、いくら上の空で翻訳していても、そんな意味の通らないことを書くことはないと思います。人間は上の空であればあるほど、日ごろの動作を繰り返してしまうものです。また、この日本語の文脈だけで、読者に「二つの端を揃える」という表現から「家計の収支が赤字にならないようにする」という意味を読み取らせることは無理であることも、分かっていたはずですが。だからこそ、「収入と支出と」という割り注を加えているわけですが、そんな迂遠なことをしないで、「家計の収支が赤字にならないようにする」という日本語を与えればすむはずですが。なのに、わざわざ「二つの端」という表現を用いています。ここには、もとの英語表現、もしくは英語的発想を日本語に残そう、それが透けて見えるようにしよう、という配慮が読み取れます。

全く同じことが、下線(3)にも窺えます。「その話題には商賣とか取引とかいふ句がしてゐたから」(ギヤスケル, 5)が野上譯です。原文の savour of に、辞書通

りの「においがする」という訳が当てられています。「商賣とか取引とかいふ句」は日本語として突飛であり、パラフレーズして、もっと意味を通じやすくするなら、「商売や取引を連想させた」とでもいうことになるのでしょうか。しかし、この文の背後には、商業という営み自体がいやしいという、19世紀イギリスの文化に根ざした感覚や考え方があり、それは必ずしも日本語の読者にストレートに理解できることではありません。したがって、そこまで読者に配慮するなら、「商売や取引などといった下品なことを連想させる」などと訳してもよいところです。しかし、野上はそのようなことにはいっさい頓着せず、ただもとの英語の表現・発想が感じられる訳語を選択しています。

次に、Chapter 3 の一節です。

My visit to Miss Pole was very quiet. Miss Jenkyns <sup>(4)</sup>had so long taken the lead in Cranford that now she was gone, they hardly knew how to give a <sup>(5)</sup>party. <sup>(6)</sup>The Honourable Mrs Jamieson, to whom Miss Jenkyns herself had always yielded the post of honour, was fat and inert, and very much at the mercy of her old servants. (...) One of Miss Pole's stories related to <sup>(7)</sup>a shadow of a love affair that was dimly perceived or suspected long years before.

下線(4)の訳は「餘り長い間クランファドの指揮者になってゐたので」(ギヤスケル, 50)です。「クランファドの指揮者」は日本語として異様です。下線(5)は「會合」に「バアチ」というルビが振られています。これも、既に述べたような、原語の字面・発想を残そうという配慮といえます。

下線(6)の訳は、「ミス・ヂェンキンスがいつも名誉の地位を譲つてゐた名譽あるミズ・ヂェイミスンは、肥つて、億劫がつて、年取つた召使たちの云ひなりになっていた」(ギヤスケル, 50)です。関係代名詞節 *to whom* 以下が、まっ正直に「ミズ・ヂェイミスン」の頭に付けられています。すなわち、英語の構文についても、もとの骨格が透けて見えるように日本語を作っているといえます。また、微妙なところですが、*fat and inert, and very much at the mercy...* には、「肥っているから動くのが面倒」、「(自分で)動くのが面倒だから召使に任せっぱなし」という論理が隠されています。翻訳者によってはその論理を正確に読み取って日

本語でうまく表現するかもしれませんが、野上にはそのような考慮はありません。さらに、下線(7)の a shadow of a love affair は、「戀愛事件の陰影」(ギヤスケル、51)と訳されています。確かに、英語の字面を生かせばそのとおりですが、この場合の shadow は、しいて言うなら「ごくわずか、気配」というような意味です。したがって、意味の中心は love affair にあり、通常なら「ささやかな恋愛」とでも訳すところです。

きりがありませんが、あと一例だけ、Chapter 4 の一節をご覧くださいませ。今度は全訳を付けておきます。

When the ducks and green peas came, we looked at each other in dismay; we had only two-pronged, black-handled forks. It is true the steel was as bright as silver; but what were we to do? Miss Matty picked up her peas, one by one, on the point of the prongs, much as Aminé ate her grains of rice after her previous feast with the Ghoul. Miss Pole sighed over her delicate young peas as she left them on one side of her plate untasted, for they would drop between the prongs. I looked at my host: the peas were going wholesale into his capacious mouth, shovelled up by his large round-ended knife. I saw, I imitated, I survived! My friends, in spite of my precedent, could not muster up courage enough to do an ungenteeled thing; and, if Mr Holbrook had not been so heartily hungry, he would probably have seen that the good peas went away almost untouched.

青豆の添った家鴨(あひる)が出た時、私(わたくし)たちは當惑して顔を見合はせた。私たちは二又の黒柄の肉又(フォーク)だけしか持ってみなかった。<sup>(8)</sup> 實際その鋼鐵は銀の如く尖つてゐた。 私たちはどうすればよかったのでせう? ミス・マチはアミネがグウルと先に御馳走を食べて置いた後で、飯粒を食べる時のやうに、肉又の又の先に豆を一つづつ突き刺した。ミス・ボウルは又の間から漏れたその軟らかい若い豆を皿の片隅に寄せて、その上から溜息をついた。私は主人(ホスト)の方を眺めた。豆は大きな丸刃の包丁(ナイフ)で杓(しゃく)ひ上げられて、<sup>(9)</sup> 卸賣で彼の廣い口の中へ入り込んでゐた。 <sup>(10)</sup> 私は見た。私は眞似た。私は助かった。私の友だちたちは

私の先例を見ても、不作法な事をするだけの勇氣は出なかった。だから、<sup>(11)</sup>  
若しミスタ・ホンブルクがそれほど心から飢ゑてゐなかつたならば、彼は多  
分、その善い豆が殆んど手もつけられないで運び去られるのを見たであろう。  
(ギヤスケル, 70-71)(なお、上引用の括弧内は原作ではルビ)

ここでは、翻訳のほうに下線が付けてありますが、まずは下線(8)です。「實際その鋼鐵は銀の如く尖つてゐた」は意味不明です。原文の *It is true..., but...* というのはお馴染みの構文です。「なるほど..... だが」と譲歩的な表現をする構文で、意味の中心はそのあとに來ます。昔はおよばれに行くとき、自分のフォークを持参する習慣でした。ホンブルク氏に御馳走によばれたご婦人方が持参したのは先が2本しかないフォークで、グリーンピースを食べようとして難儀した、というコミックな場面です。この部分のポイントは「二又のフォークではどうしてもない」ということです。「持参した鉄製のフォークは見かけだけは高級品の銀器のような輝きがあるけれども、いくら見てくれがよくてもいかんともしがたい」という嘆きです。「尖っている」は明らかに誤訳です。たぶん、この一節の趣旨がよく理解できなかったのでしょうか。

下線(9)「卸賣で」の原語は *wholesale* です。これもすでに見てきた箇所と同じく、あくまでももとの英語表現が透けて見えるようにという原則に従っているようにみえます。下線(10)はカエサルの有名な言葉 *veni, vidi, vici* のパロディです。実は上の訳の転載では省略していますが、「アミネ」と「グウル」には詳しい割り注が施されています。したがって、カエサルの言葉のパロディにも当然注があつてよいところですが、現実にはありません。気づかなかつたのでしょうか？ それはそれとして、ここでも、主語を省略することなく、1センテンスは1センテンスに訳すという原則がはっきりと確認できます。

最後に下線(11)です。ここは英語の読み方としてかなり難しいところです。原文の *heartily hungry* はやや奇矯な表現です。しかし英語には *heartily eat* 「もりもり食べる」という熟したコロケーションが存在するので、*heartily hungry* という表現を読むと、「とても空腹なので脇目もふらずに食べている」というような映像が目に見えてきます。つまり、*heartily* という語によって *heartily eat* という表現が *hungry* の背後霊のように立ちのぼってきて、両方の入り交じつたような

意味が生じます。したがって、この一文は、「私」以外の客たちはナイフで豆をすくって食べるという不作法なことができず豆を皿に残したが、ホルブルック氏は空腹を満たすのに忙しくてそのことには気がつかなかった、というような意味でなければなりません。

では、このセンテンスに対して、どのような訳がありうるか検討してみましょう。

- a) もしも、ホンブルック氏が心から飢えていなかったならば、彼は多分、そのおいしい豆がほとんど手もつけられないまま運び去られるのを見たであろう。
- b) もしも、ホンブルック氏が腹ぺこのあまりがつつ食べていなかったならば、彼は多分、そのおいしい豆がほとんど手もつけられないまま運び去られるのを見たであろう。
- c) ホンブルック氏は腹ぺこのあまりひたすらがつつと食べていたので、おいしい豆が手もつけられずに下げられたことにも気がつかなかった。
- d) ホンブルック氏が食べるのに夢中で気づかなかったからよいものの、おいしい豆はあたら手つかずのまま下げられてしまうはめとなった。

a) は、ほぼ野上訳のままです。b) は、*heartily hungry* を正しくとらえて、a) を修正したものです。c) は、仮定法という英語の形式を思い切って捨てた構文になっています。先ほどから確認している野上流の原則に文字通り従うなら、当然 a) のような訳にならねばなりません。しかし、「心から」という語が日本語では「食べる」という語ととくに親しく結びついているわけではないので、英語なら当然連想されるはずの *heartily eat* の意味、すなわち「がつつ食べる」という意味が、日本語の「心から空腹」という表現から出てこないのは当然のはなしで、この一事をもってしても、単語レベルで辞書通りの訳をあてはめるという元来の野上戦略には、ある種の限界のあることが示唆されています。

そこで、野上戦略に多少修正をくわえ、意味レベルで当てはめてみることにしましょう。すると、ほぼ b) のような訳になるでしょう。仮定法という英語特有の文章構造は、きちんと残しています。

しかし、仮定法は本来の日本語の綴り方には存在しないものなので、いかにも

不自然に感じられる点は許容するにしても、この訳は読者にとってけっして親切ではありません。読者がこれを読むとき、「ああ、そうか。ホンブルク氏は実際には自分が食べるのに夢中で、気づかなかつたんだな」と文脈にそって解釈し直して理解しなければならないからです。ならば、いつそのこと、こちらの方を訳にしてしまうのが親切というものです。c)はそのような発想から作られた訳文です。

さらにもう一步踏みこんで、この段落の意味の中心が「ホンブルク氏が気づかなかつた」というより、「ご婦人方はせっかくのおいしい豆を食べることができなかつた。残念!」というポイントに存することに注目しましょう(その証拠に、それを述べた直説法の部分が段落の最後にきています)。そのことを踏まえて d)のように訳すと、「よいものの」、「あたら」、「はめになった」という modality 的なマーカーの助けもあって意味の流れが格段によくなり、読者の耳にとてもなじむはずです。ちなみに、私が一般読者のために訳しているとすれば d)を選ぶと思います。しかし、言うまでもなく、c)、d)は野上戦略から言えば邪道です。

ではこのあたりで、先ほどから「野上戦略」と呼んできた翻訳手法を、調べた実例から抽出してみましよう。ざっと、以下ようになるでしょうか。

- × 単語に辞書通りの訳語をあてはめる
- × 成句は成句としての意味ではなく、それぞれの単語を訳す
- × センテンスにセンテンスを対応させる
- × 構文は原文の通り
- × 解釈的な訳は入れない
- × 伝統的な日本語表現、日本語としての自然さには無頓着

ここまで私の話をお聴き下さった皆さんは、そこはかとなく既視感——デジャビュ感覚を覚えていらっしゃるのではないのでしょうか?——なんだ、こりゃまるで、できない学生に訳読させたときとそっくりじゃないか、と。

しかし、野上は決して無頓着であるがゆえに、あるいは英語の理解に問題があるがゆえにこのような翻訳をしたのではありません。むしろ、自分が何を行っているかを明晰に意識しながらこの翻訳を行っていました。いわば確信犯だったわ

けです。

### 野上豊一郎の『翻訳論』

野上の著書の一つに、『翻訳論——翻訳の理論と実際』なる一書があります。1938年に岩波書店から出版され、中島健蔵、小林秀雄、阿部知二、神西清など当時の著名な文化人によって高く評価されました<sup>2</sup>。優秀な翻訳者、くせのある翻訳者、あるいは少なくとも翻訳には一家言ありそうな人の名がずらりと並んでいて興味深いところです。

さて、この本の中で、野上はシェイクスピアのハムレットの有名なセリフ‘To be or not to be’は「あるか、あらぬか」と訳するのがよいと主張し、その根拠として次のように述べています。<sup>3</sup>

あるか・あらぬか、は決して日本的な表現ではないであろうが、シェイクスピアがそう云っているのだから仕方がない。それを強ひて日本的な表現に変へねばならぬ理由はどこにあるか。シェイクスピアは当時の一般のイギリス人の使用する言葉だけでは、彼の表現しようとするものを表現しきれなかったので、自由に言葉を作り、自由に語法を作った。その自由は翻訳者も当然譲り受けてよいものである。(野上, 69-70)

この有名なセリフの訳を出発点として、野上は翻訳の一般原則へと論を進めています。3つの箇所を引用しておきましょう。

西洋のものを西洋のものらしく訳するか、日本的なものに作り直すか。此の二つの態度が其処に対立する。(野上, 70)

自覚ある・すぐれた翻訳者について見ると、その態度は自然二つに分れ、一つは、何よりも原作者を重視し、飽くまで原作に忠実であらうとするものと、今一つは、反対に、読者を重視して、読者の理解と趣味を目標にしようとするものと……謂はゆる受容的態度と適合的態度である。前者の傾向を持つ翻訳者は時としてはあまりに忠実を意図して読者を置き去りにすることがあ

り、後者の傾向を持つ翻訳者はしばしば読者を顧慮しすぎて原作者を犠牲にすることがある。(野上, 92)

期待される完全な翻訳は、第一に、原作の表現が一語一語の末まで正確な意味を把握して伝えられなければならぬ。次に、用ひられた国語の特性が原作の国語の特性を最近似の度合いに於いて連想させるものでなければならぬ。最後に、さうやってまとめ上げられた翻訳は、全体として、措辞・語法の点から見ても、文勢・格調の点から見ても、原作のそれ等と同質・同量のうつつしとなってゐなければならぬ。(野上, 93)

このうち、「西洋のものを西洋のものらしく」と「日本的なものに作り直す」という2つの態度や「原作者を重視し、あくまで原作に忠実であろうとするもの」と「読者を重視して、読者の理解と趣味を目標にしようとするもの」の対照は、とりたてて「理論」というほどのものではありません。ほとんど翻訳家の「心構え」というに近く、西洋の翻訳論の歴史には、表現の違いはあれ同じ考え(アイデア)が述べられた例が散見します。例えば、ドイツの解釈学の学者であったフリードリヒ・シュライエルマハーのものは有名です。

著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす、このどちらかしかありません。(三ツ木, 38)

しかし、野上はそのような心構え的なレベルには満足できず、もう少し踏みこんで、「完全な翻訳」とは「原作のそれ等と同質・同量のうつつし」でなければならぬと主張します。その例がハムレットの「あるか・あらぬか」であり、その主張を実践する形で世に問うたのが『クランファド』の翻訳であったということになります。

### ベンヤミンの逐語主義

この野上の翻訳議論の核心を占めている主張、とりわけ「あるか・あらぬか」

という訳については同時代の人々からも異論がありましたが<sup>4</sup>、これについては触れないことにします。また、野上の実際の翻訳がこの原則に照らし合わせてどうなのか、あるいは、翻訳としてどう評価できるかなどということについても論じないことにします。ただし、ここで一つ注意にとめておいていただきたいことがあります。すなわち、野上が理想とする翻訳理念は、一見したところ分が悪いことは確かです。例えば、別宮貞徳ははげしい口調で揶揄しています。

外国のものを翻訳したときに、その表現や様式がなぜ外国のものらしくなければならぬのか。なぜそんなに外国のものらしさをありがたがるのか。(…)  
外国のものはすべてよしとして、その形をまねることに至上の価値を見いだすのは、愚の骨頂だろう。(別宮 1985, 64-65)

しかし、野上の主張は、翻訳をめぐる議論の中では一つの立場として大いにありうるものです。ありうるどころではありません。げんに、上に引用したシュライエルマハーは、「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす」ことこそ、あるべき翻訳の姿であると主張しています。また、20世紀のヨーロッパ文化に大きな影響をあたえた哲学者ベンヤミンは、「翻訳者の使命」というエッセイの中で、翻訳の理想として、徹底的な逐語主義を唱えています。

それゆえ翻訳が生まれた時代において、その翻訳がその国の言葉で書かれた原作であるかのように読めるというのは、実は翻訳に対する最高の賛辞とはいえない。むしろ逐語性によって保証される忠実の意義……。真の翻訳とは、訳文を透けて輝き出るものであり……いよいよ豊かに純粋原語の影を原作の上に落としかける。これは、とりわけシンタクスを移すという形での逐語性によって可能となる。語が、文でなく語こそが、翻訳者の仕事の原要素である……。(三ツ木, 202)

ベンヤミンの主張はユダヤ教がらみの議論の文脈でなされており、神秘思想のように見えるところもありますが、決してただの空理空論という訳ではなく、ベンヤミンは実際にボードレールの詩の翻訳を逐語主義の原則に従って行っていま

す。また、詩人ヘルダーリンによるソフォクレスの翻訳も、徹底した逐語主義に則って行われたことも有名です。<sup>5</sup>

このように、英米の翻訳論の伝統的な用語を借りるなら「忠実 (fidelity)」か「自由 (freedom)」かという問題は、共時的な枠組みの中で議論されることが多くありました。しかし、これは通時的な文脈でも意味をなす問題でもあります。ある文化の中の翻訳の歴史を振り返るなら、現代の日本のように比較的「自由」が好まれる時代もあれば、「忠実」をよしとする時代も実際にあったことは明らかです。

その例は、足もとに目をやればすぐに見つかります。わが国における漢文の発明こそがまさに好例です。野上流に云えば「中国のものは中国らしく」とでもなるのでしょうか。さすがに返り点等を書き込むことによりシンタックスは半分日本語化しているといえますが、単語 (語彙) はもとの中国語のままです。昔の日本人はこのような形を取ることで、原語をそのままにして、日本人のほうを原語の世界に近づけようとしたということになります。一般的に、ある文明が、自らの文化の後進性を自覚している場合には、このように「忠実」がプラスの価値を帯びるのがふつうです。

## 『雪国』

では、ここで、翻訳法にまつわる価値の転換が、この数十年の間に、我々の鼻の先で起きていることをご覧いただこうと思います。例として挙げるのは、有名な川端康成の『雪国』の冒頭の段落です。川端康成がばらばらに発表していた短編を集めて『雪国』という一編の小説として上梓したのは、1948年のことでした。これを Edward Seidensticker が英訳して世界的に有名となり、川端康成のノーベル文学賞受賞へとつながっていきます。まずは原作の冒頭の1段落をお読み下さい。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

有名な一節ですが、私には「夜の底」という表現が謎で、子どもの頃から頭を悩ませてきました。皆様はいかがでしょうか？ どんな意味だと思われますか？

そもそも、「夜の底」という表現は川端康成の発明ではありません。芥川竜之介の「羅生門」の末尾に、「下人は……またたく間に急な梯子を夜の底へとかけ下りた」という表現があります。この場合の意味は明らかです。「暗い空間の下のほう」という意味でしかありえません。しかし、「底」という語は空間の上下のほか、「奥」という意味にもとれます。例えば、漱石の『坊っちゃん』には「空の底」から日が照りつけてくるというような表現があり、この場合の「底」は明らかに「奥」という意味です。私は子どものころから漱石ばかり読んでいたせいか、「夜の底」の「底」にも「奥」のニュアンスを感じてしまい、川端の文も、雪国に入ると、あんどんに灯がともるように空全体がぼうっと明るくなった、という意味に読んでいました。

長年心に秘めていた恥を、生まれて初めて告白したところで本題に戻りますが、「夜の底が白くなった」の英訳について考えてみましょう。例えば、英作文の授業で学生に訳してごらん、と言ったとします。どんな解答が返ってくるか予想はつきません。

#### The bottom of the night turned white.

意地悪な、教師根性丸出しの皆さんはこんな英訳を予想して、「ねえ、君、英語に訳すというのは、ただ和英辞典で調べた単語を当てはめればよいというものじゃないんだよ」などというセリフを心の中に用意しつつ、学生が‘The bottom...’と言い出した瞬間に飛びかかってやろうと、まるで獲物を狙うライオンのように待ちかまえているのではないのでしょうか？ いや、ぜったいにそうです！

でも、本日は皆さんに変わって、鬼の別宮先生に叱ってもらいましょう。

この英語は全く意味をなさない表現で、これを読んだイギリス人あるいはアメリカ人はきっと吹き出すに違いない。night は時間的な概念であって、決して空間的な概念ではない。空間ではないのだから上も底もありようがないし、それは別としても、「bottom(尻)が白くなった」とは、いささか erotic な obscene な連想をしてしまう……。 (別宮 1975, 85)

ここで一つご注意ですが、night はかならずしも時間的な概念ばかりでなく、日本語とまったく同じように「暗闇」という意味の空間的意味で用いられることがあります。例えば ‘In despair, he ran into the night.’ などという文は小説に出てきてもおかしくありません。

それはともかく、この別宮先生の指摘に我が意を得たりと思っていられしやる先生は多いと思います。果たして、1956年のサイデンステッカーの訳は、以下のようなものでした。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.(Kawabata 1957, 3)[ 下線 山本 ]

その後、ヨーロッパ諸言語で『雪国』の翻訳が進みました。問題の箇所だけをご紹介しますが、1959年のイタリア語版は ‘La campagna si stendeva bianca sotto il cielo notturno.’ [The country extended itself white under the night sky.](Kawabata 1959, 11) なので、解釈としては英語版をほぼ踏襲していることが分かります。1960年のフランス語版は ‘L’horizon avait blanchi sous la ténèbre de la nuit.’ [The horizon had whitened under the dark of the night.](Kawabata 1960, 15) となっています。「地平線が白んだ」と書かれているので、これは夜明けのイメージになっているように感じられます。次は1968年のドイツ語版です。 ‘Die Nacht war weiß bis auf ihren Grund.’ [The night was white to (on) her [night's] ground.](Kawabata 1968, 3)、すなわち「夜は地面まで白かった」ということになり、夜空全体がぼんやり白くなったという解釈がなされていることが分かります。これは、私の「あんどん説」とまさに同じではありませんか。私の珍妙(斬新?)な解釈も、数千里の大洋を隔てた異邦に思わぬ知己を見出したというわけです！

冗談はさておき、以上の例を見る限り、これらの訳はいずれも、詩の一節のように書かれた原文を散文的に解釈し、その結果を「意味」として表現するという翻訳法が採られていると言えます。ちなみに、厳密に考えるなら、翻訳の方法としては少なくとももう一種類考えられます。すなわち、原文とほぼ同じくらいの曖昧さを含んだ詩的表現を創造する、という方法です。その観点からいって、次

のような英訳はいかがでしょうか？

The air sank white deep down the night.

どうでしょう？「夜の空気が沈んで、暗闇の底に白く沈殿した」というわけです。雪は空気の精が沈殿した澱のようなものだという詩的な見立てをおこない、音響的にも deep、down の頭韻はいわずもがな、4 音節ごとに white と night の脚韻が心地よいリズムを刻みます。すてきですね。おしゃれですね。エレガントですね。——私の訳です。

さて、サイデンステッカーはなくなる少し前の 2000 年ごろに *Snow Country* を改訳し、「デラックス版」として出版しました。そこで、問題のセンテンスはどのように訳されていたでしょう？ ずばり——

The bottom of the night turned white.

でした。高校生なら大目玉を食らうことを、サイデンステッカーがのうのうとやってのけたということになります。

### 野上は予言者か？

では、ここでまず、サイデンステッカーが、なぜこのような訳でも大丈夫だと考えたのか、ということについて想像してみましょう。それというのも、別宮先生の顔を立てるわけではありませんが、確かに、‘The bottom...’ の訳は、ふつうの基準から言えば英語として稚拙であることに相違ないのです。

まず、(a) 現時点では川端がすでにノーベル賞作家として世界的に名を知られている、ということが挙げられます。すなわち、読者自身が作家としての格付け、判断をしなくてもすみます。ノーベル賞作家なんだから、何か意味のあることを述べているだろうと思って、読者はいくらかでも難句を解釈してくれます。かりに本に虫食いの穴があっても、意味を見つけてくれることでしょう。(b) 日本の小説は英米のものとは違うのだという常識が、今となっては英米の読者に了解されているでしょう。さらに、(c) 「夜の底」の意味を知ろうと思えば、それを調べる

手段がふんだんにある、という条件も考えられるでしょう。

この他にも、「逐語訳」を可能にする条件は考えられるかもしれませんが、それにしても、サイデンステッカーはなぜそもそも変えなければならないと感じたのか、しかも、なぜこのように変えたのか、という疑問が残ります。その答えは、

- (d) 英語 (英米文化) が絶対という「常識」が英米の文化の中で弱くなっている、もしくは、そのように考えなければならないという「常識」が強くなっている、

ということだと思います。ポストコロニアリズムが唱えられて久しいですが、英米文化の中に暮らす人々も、少なくとも表向きはそれに向かってリップサービスなりともしないではすまないというのが今や常識となっているのでしょうか。おそらくこのような文化的背景も大きく影響してのことだと思いますが、20世紀後半に1つの学問分野——ディシプリンとして確立されてきた「翻訳学」 Translation Studies の中で、その現代の代表的な研究者と目されているロレンス・ヴェヌティが、翻訳における *foreignization* の重要性を、1990年代から主張しています。

ヴェヌティは、英米の翻訳では、伝統的に *domestication* をよしとするという考え方が支配的であったことを指摘します。すなわち、英語としての自然さ、はじめから英語で書かれているかのような翻訳がよいとされてきました。つまり、翻訳者は *invisible* であるのがよいとされてきました。これに対して、*foreignization*、すなわちもとの言語や文化的特徴が感じられる翻訳こそ望ましいというのが、ヴェヌティの大きな主張です。

かりに翻訳学の直接の影響ではないにしても、このような考え方が出てくるようになったのと同じ文化的潮流、思想的変化の中から、サイデンステッカーの ‘The bottom of the night’ も出てきたことは間違いないでしょう。

では、最後に、野上豊一郎の翻訳方法を振り返ってみることにしましょう。

野上豊一郎は逐語的な翻訳がすぐれていると主張しました。「用いられた国語の特性が原作の国語の特性を最近似の度合いにおいて連想させるものでなければならぬ」と述べています。これはヴェヌティの主張の中にある ‘*foreignization*’ とよく似ています。では、野上はヴェヌティの主張の先駆けだったのでしょうか？ 深い意味で、サイデンステッカーの先達だったのでしょうか？ 野上は未来を見

透かすことのできるヴィジョナリー——予言者だったのでしょうか？

ヴェヌティは *foreignization* について、次のようにも述べています。

In developing such a strategy, however, fluency is not to be simply abandoned, completely and irrevocably, but rather reinvented in innovative ways. The foreignizing translator seeks to expand the range of translation practices not to frustrate or to impede reading, certainly not to incur a judgement of translationese, but to create new conditions of readability.(Venuti, 19)

すなわち、「異物」としての風味を単純に残すのではなく、あらたな *fluency* ないしは *readability* を追求するのが *foreignization* だという説明です。ハムレットの *to be or not to be* に関連して、「それを強ひて日本的な表現に変へねばならぬ理由はどこにあるか」と言い放つことのできる野上とは、まったく異なる主張であることが理解されるでしょう。

というわけで、残念ながら、野上豊一郎の『クランファド』は、世界の翻訳史に燦然と輝く先駆的作品である、という評価を下すことはできません。正直なところ、翻訳としては読みにくいものであり、かつ英語を正確に理解していないところも散見します。したがって、時間の堆積にうずもれてほとんど化石になりかけている、というのが妥当な評価でしょう。ほとんど誰もその存在を知らないという事実が、何よりもこの翻訳の評価となっています。

しかし、翻訳の議論の中では、興味深い実験の一例となっているとはいえるでしょう。サイデンステッカーの *the bottom of the night* は、必ずしも『雪国』の全体に *foreignization* の原則を貫こうとしたものではありません。ところが、野上は作品全体をその原則で押し通しています。過去においては、社会科学や哲学などの著述の場合にこのような原則で翻訳することはむしろ普通でしたが、文学作品でここまで徹底して行っている例は珍しいといえます。また、翻訳についての深い考察をへた上で、このような翻訳方法を選んでいるというのも興味深い点です。そのような意味で、日本の翻訳史ばかりか、*Translation Studies* の研究の素材として興味深いものとなるのではないかと思います。

以上、野上豊一郎による、ギヤスケル夫人の *Cranford* の翻訳にからめて、Translation Studies のお話しをさせていただきました。つたない話をご静聴ありがとうございました。

## 注

- 1 以下は 2013 年 10 月 5 日に中央大学にて行われた日本ギヤスケル協会の、例会での講演のために用意したメモに基づいている。当日の楽しい雰囲気を記念し、それを再現しようとしているため、談話の調子で進めることをご了承いただきたい。
- 2 柳父 286 ページ参照。
- 3 『翻譯論－翻譯の理論と實際』よりの引用は旧字体を新字体に置き換えた。
- 4 大山・吉川参照。
- 5 スタイナー 85～111 ページ参照。

## 参考文献

- 大山定一・吉川幸次郎『洛中書問』筑摩叢書、1974 年。
- ギヤスケル、エリザベス(オースティン、ジェイン)『高慢と偏見下巻 附クラフアド』平田禿木・野上豊一郎訳、國民文庫刊行会、1928 年。
- スタイナー、ジョージ『アンティゴネーの変貌』海老根宏・山本史郎訳、みすず書房、1989 年。
- 野上豊一郎『翻譯論－翻譯の理論と實際』岩波書店、1938 年。
- 別宮貞徳『翻訳と批評』講談社学術文庫、1985 年。
- 『翻訳を学ぶ』八潮出版社、1975 年。
- 三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』白水社、2008 年。
- 柳父章他編『日本の翻訳論』法政大学出版局、2010 年。

Kawabata, Yasunari (tr. by Edward G. Seidensticker). *Snow Country*. Tokyo: Tuttle, 1957.

Kawabata, Yasunari (tr. by Sawa Nakamura Deangelis and Luca Lamberti). *Il paese delle*

*nevi*. Torino: Einaudi, 1959).

Kawabata, Yasunari (tr. by Bunkichi Fujimori and Armel Guerne). *Pays de neige*. Paris: Albin Michel, 1960.

Kawabata, Yasunari (tr. by Oscar Benl). *Die Tänzerin von Izu ; Tausend Kraniche ; Schneeland ; Kyoto : ausgewählte Werke*. München : Carl Hanser, 1968.

Venuti, Lawrence. *The Translator's Invisibility*. London: Routledge, 2008.

(東京大学教授)

Abstract

**Nogami's Translation of *Cranford*:  
To be Literal or Not -- That is the Question**

---

**Shiro YAMAMOTO**

---

*Cranford* was probably the first of Mrs Gaskell's works to be translated for the reading public in Japan. This Japanese version was made by Nogami Toyochiro, one of the pre-eminent scholars of English Literature in the pre-war period. This introduction of a hitherto unknown writer – and one of the finest Victorian novelists, no less – is in itself a remarkable achievement, but it was remarkable in another sense, too. Nogami, who was also famous as a translator, followed to the letter the principle of translation that he himself recommended in his magnum opus, *Honyaku-ron (On Translation)*, published in 1938, resulting in a more or less literal rendition of the novel into Japanese. His method dictated a rather simple word-for-word replacement of vocabulary and the preservation of as much of the grammatical structure of the original as is achievable between such widely divergent languages as English and Japanese. The resulting, very literal translation did not set the *Edogawa* on fire at the time, and it now seems to have become almost lost in the sediments of time. However, among recent developments in Translation Studies, the importance of literalism in translation has been rediscovered, and among others, Lawrence Venuti, one of the leading figures in the field, has contributed importantly to the idea of a 'foreignized' translation. Do Nogami and his *Cranford* deserve a reevaluation and restitution? Was Nogami a prophet, or a genius who came too early? Unfortunately, Nogami's principle of literalness does not include readability among its criteria, which is indeed one of the central features of Venuti's concept of 'foreignization'.